三郷村の埋蔵文化財第３集

東小倉遺跡

（～県道側溝工事に伴う工事立会調査報告書～）

1997・3

長野県南安曇郡三郷村教育委員会

三郷村の埋蔵文化財第３集

東小倉遺跡

（～県道側溝工事に伴う工事立会調査報告書～）

１９９７・３

長野県南安曇郡三郷村教育委員会

遺跡付近航空写真　円内は発掘調査地点

序

東小倉遺跡は、縄文時代を中心とする包蔵地が集まる黒沢川流域の中でも最も下流に位置する遺跡で、かねてから土器、石器の密度の高い散布地として知られており、三郷村でも最大級の縄文集落があった所とみられています。平成５年度には、包蔵地内の畑の発掘調査が行われ、縄文時代中期の竪穴式住居址４軒、小竪穴１基、土坑２基などの遺構や、多量の土器、石器などの遺物が出土し、遺跡の一端が明らかになりました。

さらに平成８年４月と12月に行われた県の排水路工事の現場立ち会いでは、実に５軒もの住居址が確認されました。それも幅1.5mほどの側溝工事での発見であり、この遺跡の住居址の分布密度の高さには驚くばかりです。

今回は県との協議で工事立ち会いとしましたが、発掘調査に相当する遺構、遺物の検出があったことから、調査報告書として刊行することにいたしました。東小倉遺跡の概要がより明確になり、郷土の歴史を研究する上で大きな足跡を記したと言えます。

しかし、現在の発掘調査のほとんどが開発を前提とした緊急発掘であり、調査終了後は破壊されていきます。今回も５軒の住居址が見つかりながら、最後は工事の中に没して行きました。四千年前の人々の苦労を思うとき、このような現状には心が痛みます。今回の報告書を多くの方々にご覧いただき、郷土の歴史への関心や理解が深まり、文化財保護の意識が高まることを期待するものです。

最後になりましたが、急な工事立ち会いであったにもかかわらず、骨身を惜しまずに調査と報告書の編集に携わっていただきました山田瑞穂先生に心より感謝申し上げます。また工事の進行にご配慮いただいた、豊科建設事務所及び工事関係者の皆様を始め、調査にご協力いただいた方々、そして、報告書作成に優秀な技術と誠意をもってあたられた、藤原印刷㈱に対し厚く御礼を申し上げる次第です。

平成９年３月

三郷村教育委員会

教育長　藤　松　鴻之輔

例　　言

1、本書は、東小倉遺跡地内を通過する排水路の改良工事に伴う緊急立会調査報告書である。

2、調査には、三郷村教育委員会と山田瑞穂が立会った。

3、本書の編集は、那須野雅好と山田瑞穂が主として行った。

4、本書作成における分担は次の通りである。

○遺構の測量・実測図・トレース……山田瑞穂

○遺物整理・実測・拓本・トレース……山田瑞穂、那須野代史子、中村予至子、田々井誉子、牛山愛子

○石器実測・トレース……降旗俊行

○土層観察と実測……木船　清

遺構図の土層番号は第2章第1節に示してある。

○写真……那須野雅好

○第5号住居址の断面図実測は長野県教育委員会文化財保護課指導主事原明芳先生が行った。

○実測図等の縮尺は、図に示してある。

5、調査の諸記録・実測図・遺物等は三郷村教育委員会が保管している。

6、遺構番号は、平成5年の発掘調査に続いて付けたので了とされたい。

本 文 目 次

序
例言
第１章　立会調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至るまで …… 1
　第２節　調査体制 …… 1
　第３節　調査の経過 …… 2
第２章　東小倉遺跡周辺の環境 …… 4
　第１節　地形と地質 …… 4
　１．地形 …… 4
　　(1)梓川扇状地と黒沢川扇状地 …… 4
　　(2)黒沢川扇状地北部 …… 4
　２．地質 …… 7
　　(1)黒沢川扇状地 …… 7
　　(2)調査地点 …… 7
　第２節　歴史的環境と村内の遺跡 …… 9
第３章　確認された遺構と遺物 …… 13
　１．第５号住居址　(1)遺構　(2)遺物 …… 13
　２．第６号住居址　(1)遺構　(2)遺物 …… 13
　３．第７号住居址　(1)遺構　(2)遺物 …… 14
　４．第８号住居址　(1)遺構　(2)遺物 …… 15
　５．第９号住居址　(1)遺構　(2)遺物 …… 15
　６．土　坑 …… 16
　７．不明落ち込み …… 16
第４章　まとめ …… 23

挿 図 目 次

第１図　黒沢川扇状地北部の地形 …… 5
第２図　調査地点で見られる凹地と遺構全体図 …… 6
第３図　第６号住居址北部の柱状図 …… 7
第４図　第６号住居址付近の柱状図 …… 7
第５図　第９号住居址西部（不明落ち込み）の柱状図 …… 7
第６図　三郷村の遺跡分布図 ……10・11
第７図　東小倉遺跡第５、６、７号住居址実測図 …… 17
第８図　東小倉遺跡第８、９号住居址実測図 …… 18
第９図　東小倉遺跡第６、７号住居址出土土器拓影 …… 19
第10図　東小倉遺跡第７、８、９号住居址出土土器拓影 …… 20
第11図　東小倉遺跡出土石器 …… 21
第12図　東小倉遺跡土坑３～10、不明落ち込み断面図 …… 22

図 版 目 次

図版１．工事進行状況と６号住居址埋甕出土状況
２．７号住居址と石柱
３．６、７、８号住居址出土遺物
４．６、７、８号住居址出土土器

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまで

東小倉遺跡は黒沢川の左岸一帯に広がる遺跡で、縄文時代中期の土器や石器の密度の高い散布地として知られていた。年代的に南松原遺跡の方が古く、勝坂式期の集落であるのに対し、東小倉遺跡は加曽利Ｅ式期の集落で、縄文時代中期後半の遺跡である。

平成８年４月５日、県の側溝工事中に土器片が発見されたために工事を中断、翌４月６日に県教育委員会　原　明芳先生に依頼して現地調査を行った結果、縄文の住居址の床断面が１軒確認された。来年度工事も包蔵地内で予定されているということから、豊科建設事務所に対し事前協議をもつように依頼する。

平成８年11月14日、同建設事務所より第57条の３第１項の申請がされ、４月の工事の延長部分に対する対応が検討された。県教育委員会とも協議した結果、水路の掘削幅が約1.5mと狭く、遺構の検出は難しいという判断と、建設事務所側の工期が切迫しているという実情から、工事立ち会いで遺跡の確認を行うこととした。

三郷村教育委員会では当村の埋蔵文化財の実情に詳しく、平成５年度の東小倉遺跡の発掘調査でもお世話になった山田瑞穂先生に工事立ち会いをお願いした。しかし、工事が既設のＵ字溝を剝がしながら掘削し、新しい側溝を布設して行く工法のため、連続して６日間にわたり現場で工事を見守ることとなり、山田先生の不在の時は不慣れながら教育委員会職員が対応することとなった。

第２節　調査体制

立ち会い者	山田瑞穂	（日本考古学協会員）
〃	木船　清	（三郷村教育委員会　社会教育指導員）
〃	赤羽　篤	（三郷村教育委員会　社会教育係長）
〃	那須野雅好	（三郷村教育委員会主査　文化財担当）
〃	飯田弘一	（三郷村教育委員会主事）
〃	甕　敦子	（三郷村教育委員会主事）
報告書作成協力員	降旗俊行	（長野県考古学会員　社会保険事務所）
〃	中村予至子	
〃	田々井誉子	
〃	那須野代史子	
〃	牛山愛子	

第３節　調査の経過

工事立ち会い

平成８年

４月６日(月)　晴れ　午前９時～午後12時30分

・　県教育委員会　原　明芳先生による調査。前日発見された土器周辺の地層を調べた結果、竪穴式住居址の床面が断面として検出された。すでに掘削された部分も丹念に調査したが、今回の工事計画内での検出はこの１軒であった。その後、原先生と豊科建設事務所　野間課長、教育委員会　那須野の三者で協議し、豊科建設事務所に対して、翌年度予定されている継続工事について保護協議を行うように要請する。

12月16日(月)　曇り

・　午前９時からの工事開始予定であったが、請負業者の都合により午後２時からの立ち会いとなった。30mほど掘り進んだ段階で２箇所の落ち込みが認められ、住居址と確認される。うち１軒は床面断面として記録することになり、床面下から植木鉢状の完全な形の土器が伏せた状態で発見される。また、もう一軒は床面が破壊されていないため、翌日の午前中に床面までの調査を試みることとした。

12月17日(火)　曇り

・　午前９時から発掘調査。半円状に周溝が検出される。また、２個の柱穴と信仰に使われたと思われる石柱と集石が見つかる。午前中に記録をとった後、遺構はまもなく工事に没する。慌ただしい調査であった。そのほかいくつかの土坑や土器石器等が発見され、改めて住居址の密集地であることを実感する。

12月18日(水)　雨のち曇り

・　朝方の降雨で水路に多量の水が入り、工事と調査が中断する。10時すぎ工事が再開される。遺構らしき落ち込みは確認できず。午後は新たな掘削がないことを確認、立ち会いは午前中のみとする。

12月19日(木)　晴れ

・　10時過ぎ、住居址と思われる断面を確認。山田先生不在のため、教育委員会事務局で断面図をとる。その他、土坑を一基確認する。

12月20日㈮　晴れ

・　午前８時から山田先生に昨日の落ち込みを見てもらう。周溝も発見され住居址として確認される。側溝工事では４軒目の確認となった。明日は工事が行われるが、工事立ち会いの体制が整わないため、業者に慎重工事を依頼し現地を去る。

12月24日㈪　晴れ

・　山田先生より土曜日の工事部分に落ち込みがあるとの連絡あり。急きょ現地へ出向く。すでにコンクリート製品の布設が完了していたが、明瞭な遺構が確認され、住居址１軒の検出を見る。工事終了地点手前にもう一つの落ち込みが確認され、状況から住居址とも思われたが、もう一方の落ち込みが確認できなかったため、住居址と断定するには至らず不明落ち込みとする。

遺物整理作業

平成９年

１月21日㈫～３月21日㈮　22日間

三郷村仮民俗資料館にて

（教育委員会）

第２章　東小倉遺跡周辺の環境

第１節　地形と地質

この付近の地形・地質については「東小倉遺跡（1995）三郷村教育委員会」の中で森義直氏により詳記されているので、それを参考に報告する。

１．地形

調査地域を含む信頼できる最古の地形図は、大日本帝國陸地測量部による明治43年（1910）に測図されたものがある。この図は昭和２年（1927）に増補改訂されているが、調査地域は小倉國有林と記載されており、開発前の地形を知ることができるので、この図を参考にした。

(1)　梓川扇状地と黒沢川扇状地

調査地域は松本市の西方に位置する北アルプス山麓三郷村小倉、黒沢川扇状地の北部に当たり、県道小倉梓橋停車場線の海抜652m～655mの地点である。

北アルプス山麓は日本でも有数の扇状地が見られる所である。南より黒沢川扇状地、烏川扇状地、中房川扇状地、芦間川扇状地などが分布するが、これ等の扇状地は、松本盆地の形成と北アルプスの隆起に関係しているものと考えられている。

フォッサマグナの海が北方へ海退後の更新世中期、地溝状に陥没した松本盆地に北方から高瀬川、南方からは梓川などの河川により砂礫が運搬され埋積が行われ扇状地が形成された。更新世後期には御岳火山が活動し、火山灰などを広く降下させた。その火山灰はロームとして形成中の梓川扇状地砂礫層中にレンズ状にとり込まれている。北アルプスの隆起が進むにつれ、鳴沢川や黒沢川、本神沢などの侵食力も高まり、梓川扇状地に指交関係を示しながら砂礫を運搬堆積し扇状地をつくりはじめると、それに押されて梓川は東へ移動したと思われる。黒沢川扇状地は、梓川扇状地を土台として形成された。

更新世後期末に乗鞍岳が火山灰を噴出した最終活動があり、その火山灰が梓川扇状地や黒沢川扇状地を厚くおおった。約一万年前の出来事で、このロームでおおわれた面を上野面と呼ぶ。黒沢川扇状地は大部分が上野面にあたる。

上野面形成後土地の隆起があり、それに伴い梓川の下刻作用が進み、上野面の扇端が侵食されて幅と呼ばれる侵食崖がつくられた。このときつくられた段丘が、上野面より一段低い丸田面と呼ばれる段丘である。梓川村丸田、立田、三郷村の大部分がこの面上にある。

(2)　黒沢川扇状地北部

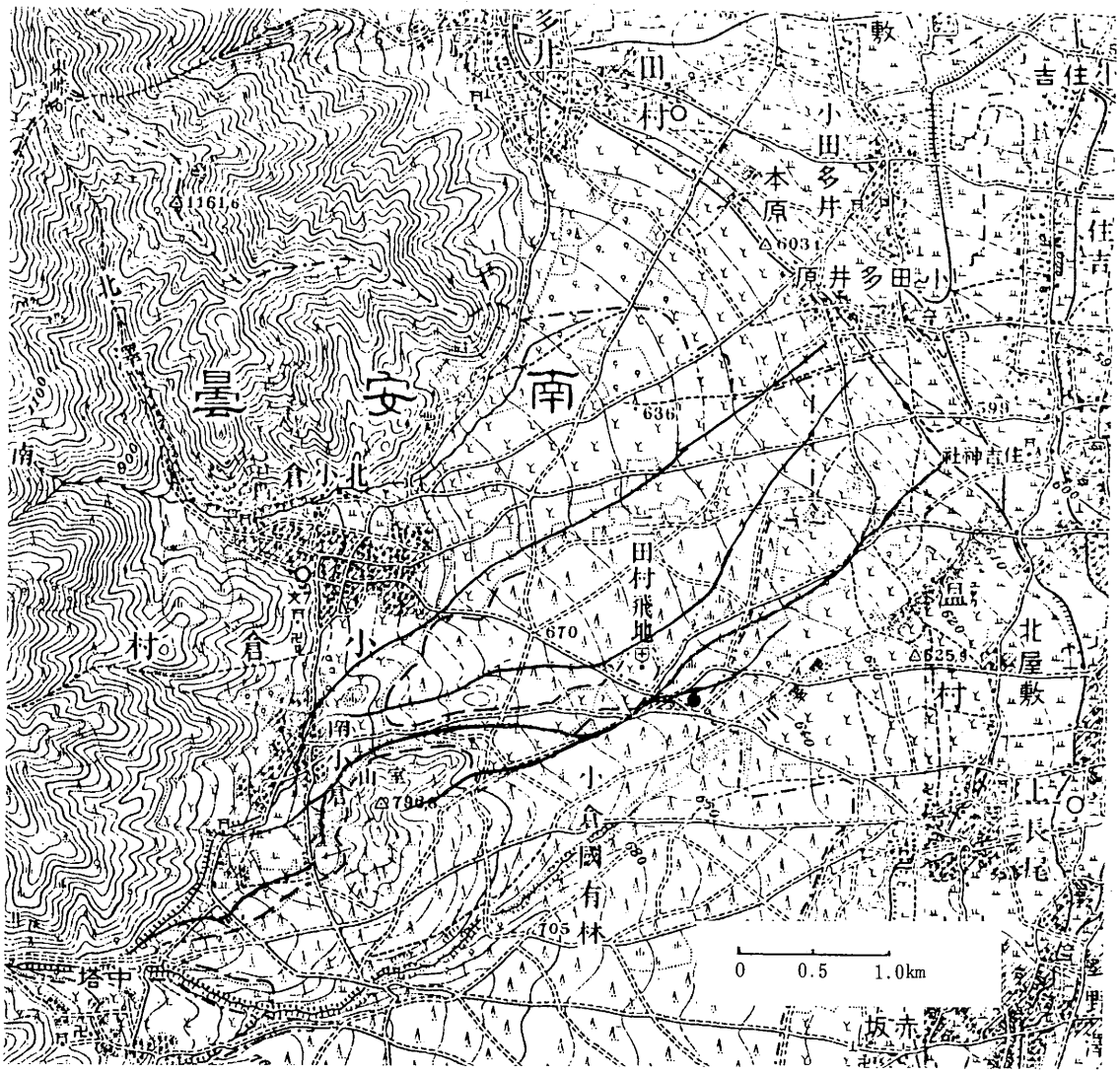
調査地は黒沢川左岸で黒沢橋の西北西約150m、比高約７mに位置する。この付近の凹地（少なくとも出水時には水が流れたと予想される）を地形図上で示したのが第１図で

ある。

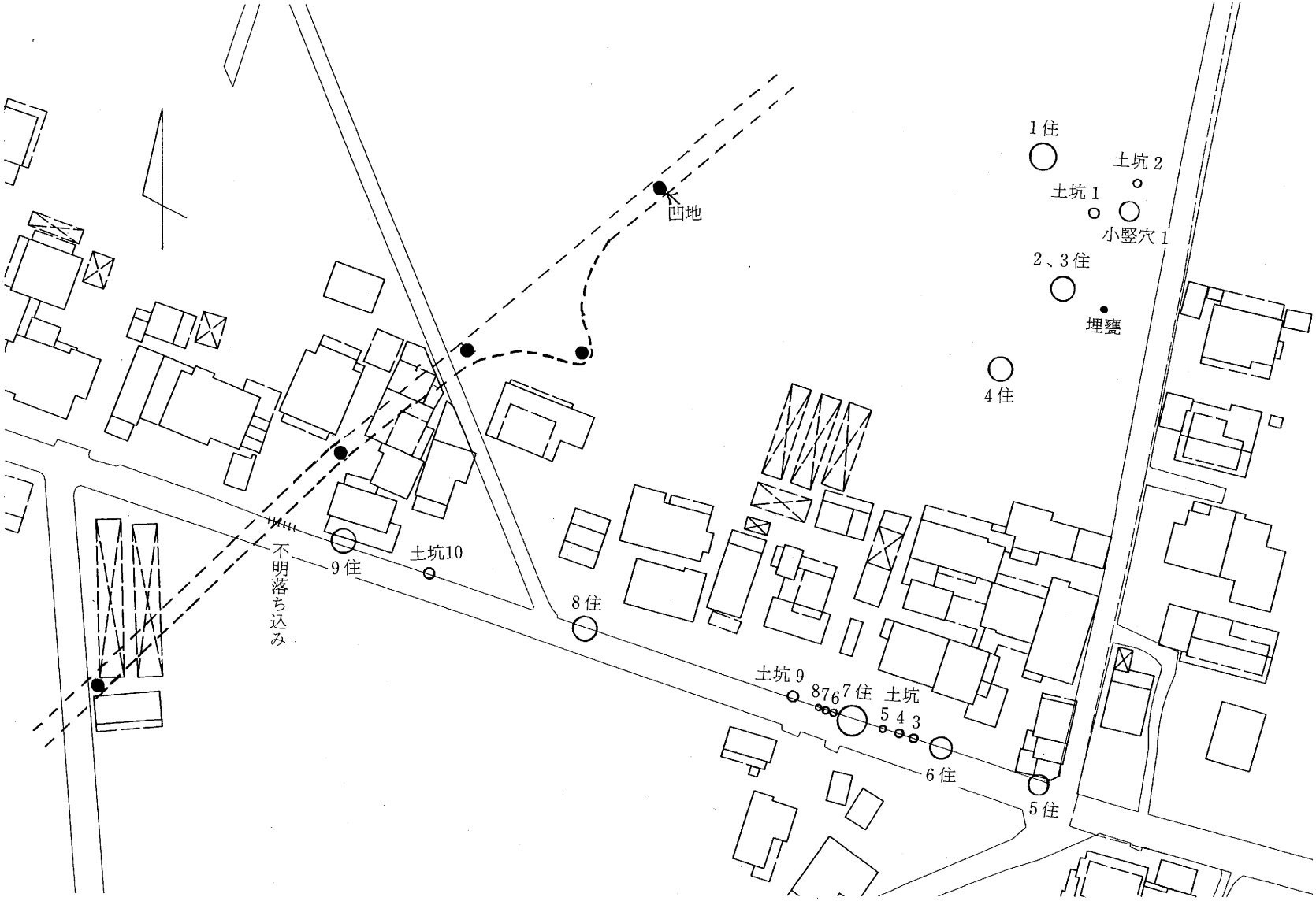
この図から鳴沢川と黒沢川のつくる扇状地は指交関係にあるも、浄心寺から小田多井原にかけての凹地で複合しているのが見られる。

全体の凹地の示す方向は現黒沢川や鳴沢川とほぼ平行しており、北東の方向を示している。調査地は北東方向に緩く傾斜する扇面上に位置するが、この付近の凹地を上流へ辿ると室山の西側を経て北黒沢川へ続くと推定できる。

また第９号住居址の西方に北東―南西方向に続く浅い凹地が見られ、この一部は今でも池として利用されているが、これは、上記推定される凹地の支流ではないかと思われる（第２図)。



第１図　黒沢川扇状地北部の地形　　～　凹地を示す
●　調査地点



第2図　調査地点で見られる凹地と遺構全体図（1：1000）

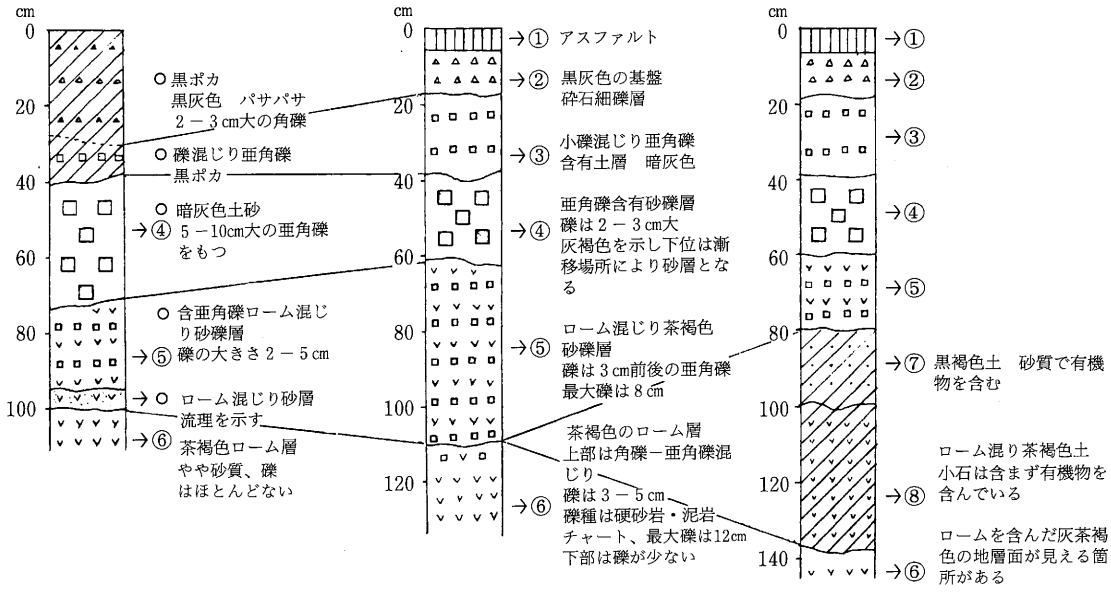
2．地質

(1) 黒沢川扇状地

黒沢川扇状地の堆積物は、梓川村の上角から三郷村野沢にかけて発達する段丘崖で見ることができる。この崖では梓川の運搬した砂礫を主に、二次的に堆積したロームがレンズ状に挟まれる。この礫中には乗鞍安山岩や焼岳安山岩の円礫が上部に目立つ。黒沢川の運搬した角礫状の砂礫は硬砂岩や泥岩・チャートが主でその上に2m～3mの乗鞍ロームが重なる。ローム堆積後、黒沢橋付近を境として、それより上流は北アルプスの隆起などの影響で黒沢川による下刻作用が進み、黒沢扇状地を解析し黒沢川合流点では比高24mの段丘崖をつくっている。一方黒沢橋付近より下流では解析され運ばれた土砂が二次堆積を行い東は上長尾の南、北は堀金村付近にかけて氾濫した。近年黒沢川の流路は固定されたが川床への砂礫の堆積ははげしく、下流は天井川となっている。

(2) 調査地点

この付近の黒沢川扇状地は主として黒沢川によって形成されたものである。上野面形成以後、その上面は黒沢川の氾濫堆積物及び北アルプスよりの押し出しによる堆積物によって覆われている。調査地は道路の側溝にあたり、一部遺構は道路の下に拡がっているので、道路工事以前の状況を、6号住居址北にあたる堀内氏邸の庭で観察した(第3図)。それによるとローム層の上部に流理を示す河川堆積物があり、その上にローム混じりの2cm～5cm大の亜角礫をもつ砂礫層が重なる。この地層は森義直(1995)による洪水時に伴う堆積物である。その上にはロームの混じらない洪水によると思われる堆積物が重なり、更にその上は角礫をもつ黒灰色の黒ポカ土となっている。



第3図　6号住居址北部の柱状図　　第4図　6号住居址付近の柱状図　　第5図　9号住居址西部の柱状図

次に、道路側の地層の柱状図を第4図に示す。この図から道路側では上位にアスファルトとその下の路盤工事によって敷かれた砕石土層が、黒ポカを取り除いた上に重ねられたことがわかる。

この道路は西へ向かって緩く高度を上げており、ローム層もその傾向を示しており、現地形はローム堆積時の地形と調和的である。この図をこの地点の標準柱状図として表し、上位より①～⑥に分け、各地層の特徴を付記すると共に、前記柱状図との関係を破線で示した。遺構図の土層断面図に示した①～⑥はこの層序によるものである。

なお9号住居址より西へ6mの地点には原因不明の落ち込みが見られたので、その柱状図を第5図に示す。この地点は最下位にロームを含んだ灰褐色の地層面が見られる箇所があり、その下には礫層が存在することやこの付近を第2図に示す凹地が認められることから、上野面形成後、この地点に流水があり、ロームが流されその下位の旧扇状地の礫層が一部露出した状況があった。この凹地は⑧の茶褐色のローム混じりの有機物や⑦の黒褐色土で埋積された後、⑤の洪水時に伴う堆積物によって、覆われたのではないかと推測できる。

（木船　清）

第２節　歴史的環境と村内の遺跡

第６図でみるように、本村には現在迄に、47箇所の遺跡が確認されている。そしてその分布は、山麓沿い、黒沢川沿い、鳴沢川沿い、段丘下の水田地帯の四地帯に濃厚にみられる。段丘下の水田地帯は、平安期の遺跡が多いが、他は縄文期の遺跡が圧倒的に多いという特徴を示している。

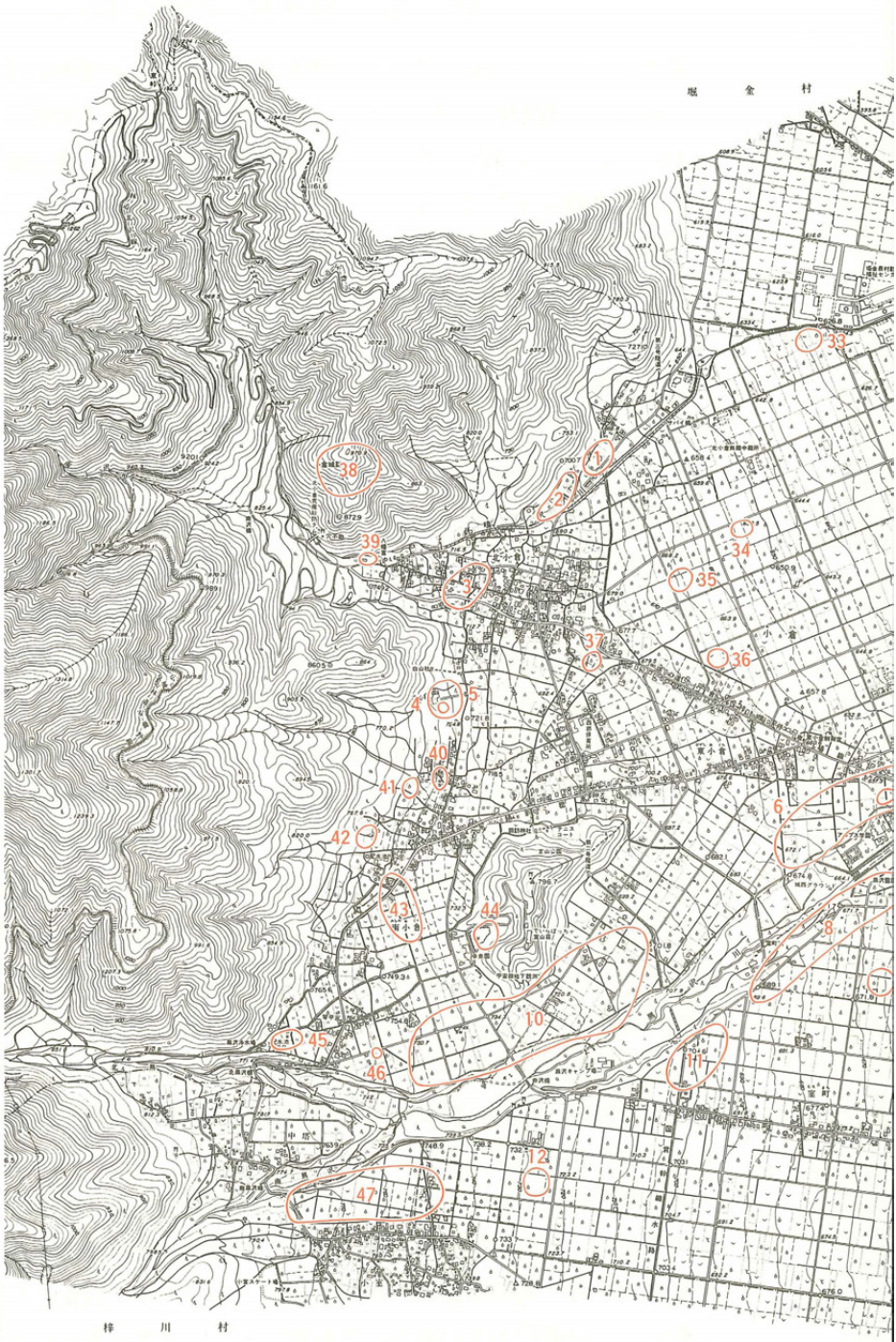
今回、調査の実施された東小倉遺跡は、黒沢川沿い（黒沢左岸）に所在し、広範囲にわたって縄文時代前期・中期・後期の遺物を出土することで周知された遺跡の一つであった。黒沢川沿いの遺跡は、上流から左岸では、黒沢浄水場東、南松原、本遺跡、三角原の各遺跡が、右岸では、押込（梓川村中塔）、長者屋敷（梓川村境界）、稲荷西、調整池北、黒沢川右岸、チンクラ屋敷、若宮、堂原等の各遺跡が続いている。黒沢川は現在は住吉神社西方で終わり、堰に接続するという珍しい川であるが、かつての氾濫原というか流路の延長である上長尾、楡、住吉の各地区に存在している各遺跡も黒沢川沿いの遺跡と呼んでもよいと思われる。昭和24年の楡道下遺跡（当時は及木遺跡と呼ぶ）の発掘調査では黒沢川の小自然流を示すかのような堆積物が観察されている。

この黒沢川周辺に人々の往来があったのは先記遺跡の内容から考えて縄文時代早期楕円押型文土器を持った人々の稲荷西遺跡への訪れにまでさかのぼると考えられていたが、前回の東小倉遺跡の調査で草創期にまでさかのぼることが判明した。次いで縄文前期には、本遺跡をはじめ、調整池北、黒沢浄水場東、黒沢川右岸（特別養護老人ホーム）に生活の場を残している。特に、本遺跡の対岸に当たる黒沢川右岸遺跡は、昭和58年に発掘調査が実施され、住居址と小竪穴を検出している。出土土器は絡条体圧痕文土器や繊維を含む縄文土器、薄い器厚の条痕文土器等であることから、縄文早期末から前期初頭に比定される内容である。黒沢浄水場東遺跡は、縄文前期末の下島式土器を出土する小範囲の遺跡であったが圃場整備事業で消滅してしまった。黒沢川沿い以外では、鳴沢川右岸に位置する北小倉の才の神遺跡が注目される。有尾式、北白川下層式の前期土器を出土する他に、後期、晩期までの内容をもつ遺跡として、三郷村はもとより南安曇郡下でも特筆される遺跡である。

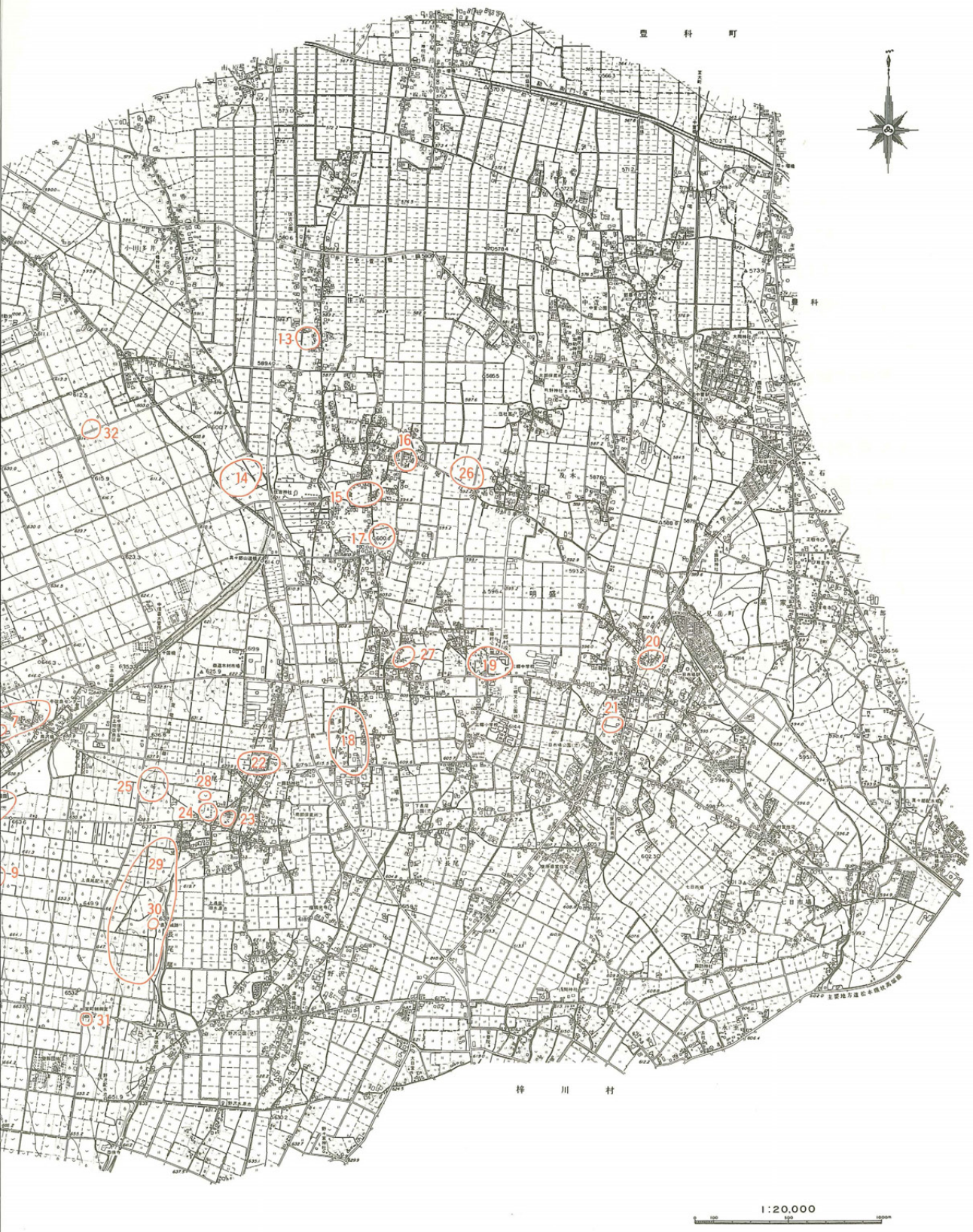
縄文時代中期になると黒沢川沿いは最盛期を迎える。本格的な村づくりが始まって、その集落が、長者屋敷、南松原、そして本遺跡にみられる。南松原遺跡は、昭和45年に発掘調査され、遺跡範囲の一部分の調査であったが、14軒の竪穴住居址の確認があった。広範囲からの遺物出土があるので規模の大きい集落が考えられる。勝坂式土器が中心を占めることから、本遺跡で今回調査されたものより先行する内容をもった遺跡といえる。黒沢川右岸遺跡からは本遺跡と同時期の竪穴住居址を検出している。鳴沢川沿いにも中期遺跡があり、三郷村で11箇所が数えられ、一番遺跡の多かった時期である。

平成３年12月制作

番号	時　　代	名　　称
1	縄文	一本松遺跡
2	〃	鳴沢遺跡
3	〃	才の神遺跡
4	古墳時代以降	浄心寺南塚
5	縄文・歴史時代	浄心寺附近遺跡
6	縄文	東小倉遺跡
7	古墳	アルプス学園前古墳
8	縄文・弥生	黒沢右岸遺跡
9	縄文・弥生	チンクラ遺跡
10	縄文	南松原遺跡
11	〃	調整池北遺跡
12	〃	稲荷西遺跡
13	縄文・古墳	丁田遺跡
14	古墳	三角原遺跡
15	〃	中村遺跡
16	縄文	楡小路遺跡
17	土師	楡上手遺跡
18	土師	栗の木下遺跡
19	土師以降	三柱神社東遺跡
20	縄文	白山神社横遺跡
21	〃	一日市場郵便局南遺跡
22	土師	上総屋敷遺跡
23	弥生	川岸最氏宅地遺跡
24	弥生・古墳	堂原遺跡
25	土師	若宮遺跡
26	平安以降	道下遺跡
27	歴史時代	坂がいと遺跡
28	古墳	平福寺附近古墳
29	縄文	長尾城址北遺跡
30	歴史時代	長尾城址
31	縄文	赤坂西遺跡
32	〃	住吉竹原遺跡
33	〃	鳴沢尻遺跡
34	〃	西牧遺跡
35	〃	地蔵沖遺跡
36	弥生	犬塚遺跡
37	土師	堀尻遺跡
38	歴史時代	小倉城址遺跡
39	古墳	北小倉１号.2号塚
40	弥生	堂屋敷遺跡
41	土師	山の腰遺跡
42	縄文	大日堂北遺跡
43	土師以降	中沢遺跡
44	縄文	ゆの久保遺跡
45	〃	黒沢浄水場東遺跡
46	古墳	富士塚
47	縄文	長者屋敷遺跡



第６図　三郷村の遺跡分布図


豊科町
梓川村
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
1:20,000

縄文後期になると本遺跡の他に、才の神、鳴沢、地蔵沖、楡小路の各遺跡が、そして晩期になると更に数が減って本遺跡と才の神遺跡が知られるだけである。全盛を極めた中期文化も次第に衰退の様相を示していることが遺跡数の上からも示されたといえよう。この現象は全県的な傾向であり、冷涼化する気候が大きく影響しているものと考えられる。三郷村の後・晩期は、上記遺跡からの散発的な土器片の出土があるだけで、その生活内容等を知る資料は今のところ得られていない。

次いで弥生時代を迎えると南安曇郡下では他地域に先がけて黒沢川右岸、堂原の両遺跡にその文化の伝来をみている。黒沢川右岸遺跡の昭和58年の発掘調査では、弥生中期の竪穴住居址を2軒検出しており、弥生文化の波及を考える上で貴重な遺跡となっている。しかし後続せず、短期間の居住で終わってしまっている。そしてこの黒沢川右岸遺跡を最後にして上流域では遺跡がみられなくなるが、古代に至って下流域の三角原、楡小路、楡中村、楡上手、楡道下、住吉丁田等に人々の居住がみられるようになる。水田地帯となっている沖積地であるが、黒沢川の川尻に当たり、黒沢川の小支流を利用しての生活であったものと考えられる。これらの遺跡は平安期の遺物を出す遺跡が多く、長尾・栗の木下遺跡や坂がいと遺跡等を含めて、住吉庄開発の歴史を考える上で大切な遺跡群となろう。

また本遺跡の範囲内であるアルプス学園前に古墳と呼んでよいのか躊躇(ちゅうちょ)するような小古墳があり、昭和25年に調査されている。石室は1m程度のもので2個の石が残っていたのみで、出土遺物等は不明である。

以上、東小倉遺跡の所在する黒沢川沿いの遺跡を中心に列記したが、先記のように三郷村では遺跡の密集する地域である。これは黒沢川の水が人々の生活にとって必要なものであったり、両側に展開する広大な扇状地は食料獲得の地として極めて重要であったからであろう。特に採集生活を中心とする縄文時代にあっては、そのことが強くうかがわれる。しかし稲作りを中心とする弥生時代以降にあっては、多孔質の扇状地は水もちが悪くて水田耕作には適さないため、順次沖積地への進出となったのである。

(山田瑞穂)

第３章　確認された遺構と遺物

１．第５号住居址

⑴　遺　構　（第７図、１）

村道514号線との交差点より西方約10mの地点、即ち、堀内国利氏宅入口部に確認された竪穴住居址である。工事進行により床面部分は削り取られてしまったが、その竪穴住居址の断面が明確に観察できた。礫を含む砂質黄褐色ローム土層を掘り込んで作られており、覆土となっている黒褐色土とは明らかな差異がみられる。

断面部は住居址の中央部に近い箇所とみられ、東西４ｍを測るものである。床面部分はほぼ平坦で一部に堅いところがある。掘り込みは東西両方とも20cm程で周壁を作っている。床面上の炉や柱穴等は不明である。断面覆土中より出土した土器の小破片から考えて本址の時期は縄文中期後半に位置づけられよう。

⑵　遺　物

床面近くの覆土から縄文中期後半の土器片の出土があったのみであり図示できなかった。

２．第６号住居址

⑴　遺　構　（第７図、２）

第５号住居址の西方約10mの地点に確認された竪穴住居址であり、水路は本址の北半部を流れることになる。

調査範囲は、1.5m幅の水路部分だけのため全容は不明であるが掘り込んだ北側と南側の断面観察から推測し、径５ｍほどの円形プランをもつ竪穴住居址であろう。掘削部の床面はパワーシャベルの刃先が当たって破壊されて不明であるが断面部には極めて堅い面がみられた。調査部分の床面には炉址等の確認はなく、中心部に当たる南側道路下にそれらが存在するものと思われる。

南側断面には東壁から1.2m入った所に32cmの炉縁石に使用したと思われる石が堅い床面上に存在した。また西壁より1.6m東には掘れなかったが径60cmほどのP1があり、穴の上に角ばった石がのっていた。周壁は断面からみて東壁22cm、西壁30cmほどである。灰褐色土を掘り込んで作られていることがわかる。注目すべきものとして西側周壁から約１ｍ入った床面下に小形の深鉢形土器が伏甕の状態で埋設されていたことである。

遺物は断面部の床面上から土器片と凹石の出土があった。土器から縄文中期後半曽利Ⅲ期ごろの住居とみられる。

⑵　遺　物　（第９図、第11図、図版１、３、４）

土器は埋甕に使用したものが唯一の器形の判明するものである。第９図14、に示した

口径11.5cm、底径5.8cm、高さ11.8cmの小形の深鉢である。底面には焼成後に打ち欠いてあけた2.5cmの穴があり、内側にその痕跡が明瞭にみられる。胎土、焼成共によく一部黒褐色のところがあるが全体としては茶褐色をしていて内面には黒色炭化物が付着している。打ち欠いた穴には炭化物付着がないことから煮沸用として使用した後、埋甕に転用したことがうかがわれる。

なお、取り上げた後、土器内部の土を精査したが、黒色土の堆積があるのみで出土遺物はなかった。

土器片は量的に少なく細片のみである。1は縦方向の隆線で飾られる曽利Ⅰ式土器の口縁部片、2は外面欠損した下に縄文をもつ口縁部片、3は波状口縁部片、4は無文の口縁部片であり、いずれも深鉢形の器形をなすものである。5は把手部の破片であり、6～10は渦巻文や沈線が施されている唐草文系の土器片である。1のみが古い様相を持つが、他は曽利Ⅱ～Ⅲ式期に比定されるものである。11～13は無文片であり、薄い胎土で焼成のよい土器片であるが器形不明である。他所より持ち込まれた土器と思われる。

石器には凹石（第11図、1）がある。安山岩製で凹みを一面に2つと反対面に連続した3つをもつものである。

3．第7号住居址

(1) 遺　構　（第7図、3、図版2）

第6号住居址の西方10.5mの地点に確認されたもので同様に水路幅部分から推測し、5.5mほどの円形プランをなす住居址と思われる。検出された部分には、床面上の施設として柱穴、周溝、石柱がある。周溝は東壁下と西壁下の両側に確認され、幅15～20cmのものが囲周しているらしい。柱穴のP1は径65×45cmで深さ43cmのもの、P2は掘削境界のため完掘できずに終わったが上部に角ばった石がみられるものである。石柱は長さ57cm、最大幅24cmの硬砂岩の自然石で倒れた状態で検出された。住居使用時には立てていたらしく下を支えたと思われる石が4個配置されている。石柱から考えるとこの住居の入口部は南西方向になろうか。炉址は中心部に当たる道路下にあるものと思われる。床面はP2の周辺にやや軟弱な箇所がみられるが、検出した他の部分は堅い面をもっていた。断面から本址の周壁は東で24cm、西で30cmほどの高さであり、礫混じりの灰褐色土層を掘り込んで構築しているのは6号住居址と同様である。出土土器から曽利Ⅲ式期ごろの住居址と考えられる。

(2) 遺　物　（第9、10、11図、図版3、4）

土器は破片のみであるが、第9図15は図上復元したものである。口径36cmの大きさであり、住居址北西部床面上につぶれた状態で出土した。無文の口縁部の下に二本の隆線がめぐり、その下に渦巻文と雑な綾杉状の沈線を施したもので、よく埋甕に使われる土

器である。第10図１、５、６は同一個体のものである。４、７は沈線と縄文で飾られている。７は底径6.5cmの底部片である。いずれも曽利III式期に比定される土器である。

石器は第11図２～７がある。２、３はチャート製の掻器、４は泥質砂岩製の打製石斧、５～７は敲打器でいずれも先端部に打痕をもつ。５は泥質砂岩、６は硬砂岩、７は砂岩製である。

４．第８号住居址

(1) 遺　構　（第８図、１）

本址は７号住居址の西方約45m離れた地点に確認された竪穴住居址である。水路は住居址の中央部を切って流れることが南北両断面の掘り込み（南、約5.8m、北、約5.4m）から判断される。住居址の規模も約６mほどの円形プランと推察できる。住居址は砂礫の多い黄褐色ローム土を掘り込んで構築してあり、東西共に周壁は約40cmの高さを測る。断面には、周壁の下に東西とも６～８cmの掘り込みがあることから、周溝があったものと思われる。床面はほぼ平坦で推移しているが砂礫が多いためか断面部分は余り堅い面とはなっていない。西壁から60cmほど入った床面に土器片が出土したのみで、床面上の施設等不明である。

(2) 遺　物　（第10、11図、図版３、４）

土器は第10図８～18の破片であるが、同一個体のものと思われる。半月形に囲まれた内部に平行条線を満たすいわゆる櫛形状文の下が縄文となる深鉢形土器である。15～18はその縄文部分の破片である。少ない出土土器からの推測であるが曽利II～III式期の住居と考えられる。

石器は第11図８の磨石がある。流紋岩製で全体的にすれており、大きさの割りには重い感じのものである。明確な凹みにはなっていないが小さなものが連続してみられる。

５．第９号住居址

(1) 遺　構　（第８図２）

本址は８号住居址より西方41mの地点に確認された竪穴住居址で、水路は断面観察から住居址北半部を流れることになる。南側の断面で4.2mを測るが、中心部は更に南側の道路下であり、推定５mほどの規模をもつ円形プランのものであろう。

工事進行で床面は削られてしまい、床面上施設は不明である。礫を含んだ黄褐色ローム土を30cm程度掘り込んで竪穴を構築してあり、周壁下に周溝がまわっていたらしい掘り込みがみられる。床面は砂礫が多いためか堅いたたき状にはなっていないが、ほぼ平坦な面をもっている。遺物出土が少なく所属時期を決めるのはむずかしいが、曽利III式期を想定したい。

(2) 遺　物　(第10図)

図示した土器片が2点のみである。共に小破片で19には沈線文、20には細かい縄文が施文されている。

6．土　坑　(第12図)

8基の土坑の確認があったが、いずれも断面観察、測定のみに終わった。従って平面形や規模は不明である。表に示したが規模は東西の断面部の長さである。出土遺物なく時期の判明するものもない。

土坑一覧表

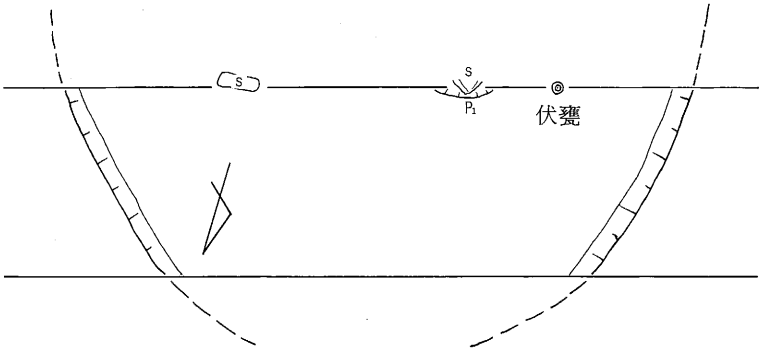
土坑番号	規模		断面形	備考
	東西径(cm)	深さ(cm)		
3	70	20	舟底形	6号住の西方2.5mの地点
4	150	30	舟底形	土坑3の西方1.5mの地点
5	130	38	舟底形	土坑4の西方1.5mの地点
6	100？	32	舟底形？	7号住の西壁に接した地点
7	70	30	V字形	土坑6に続く地点
8	65	28	V字形	土坑7に続く地点
9	100	30	舟底形	7号住の西方8mの地点
10	130	40	舟底形	8号住の西方26.7mの地点

7．不明落ち込み（第12図）

第9号住居址の西方6mの地点から西方に続いていく落ち込みで断面部分のみの調査に終わったものである。礫を含む茶褐色のローム質土が60cm辺から90cm辺にかけて、あたかも住居址の壁状に掘り込まれた状態に見られたので住居址を予期して更に掘り進めたが、落ち込みは更に深く西方へ延びて行くことが判明した。すでに工事進行が進んでU字溝が埋められていたので、これ以上の掘り下げ調査は不能で、東側の落ち込み部分を確認したのみにとどまった次第である。第5層の下に有機質分を含むと思われる黒褐色の砂層、その下に有機質分を含んだ茶褐色のローム混じり土が続いている。溝ないし自然流の痕かとも思われる土層内容で、今後の調査を待つことにした。

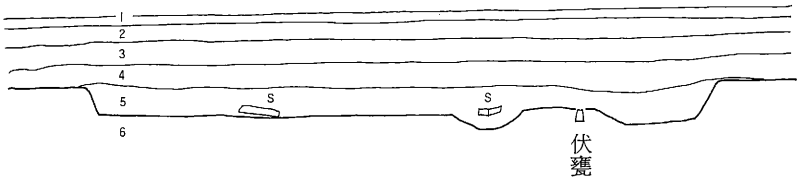
後日、地元耕作者から川の流れた凹地の存在を知らされ、その可能性を認識したところである。　(山田瑞穂)

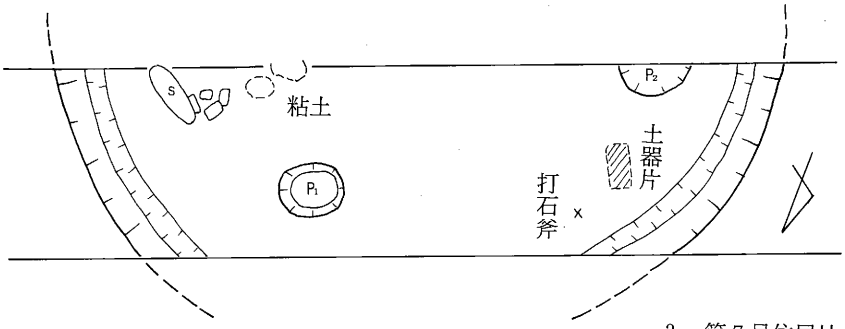
1．第５号住居址



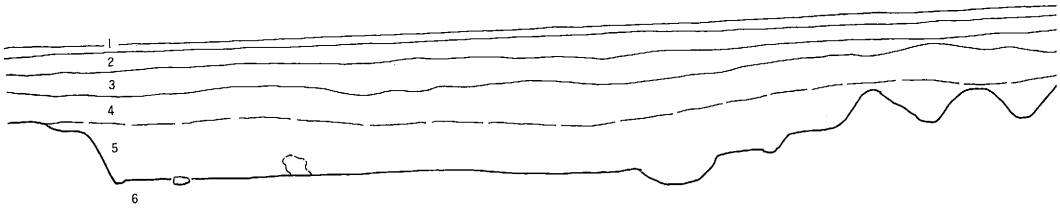
2．第６号住居址

0　1　2m

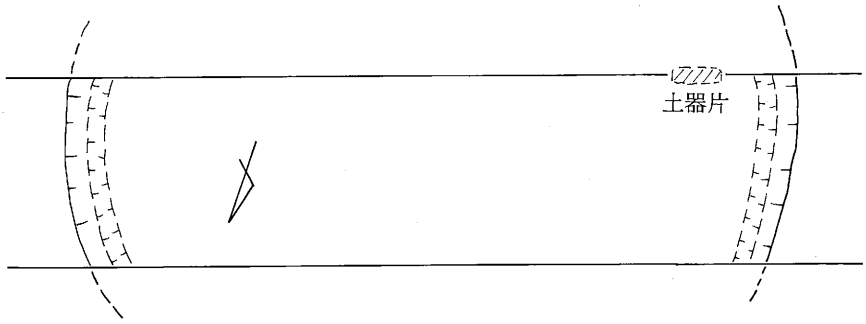


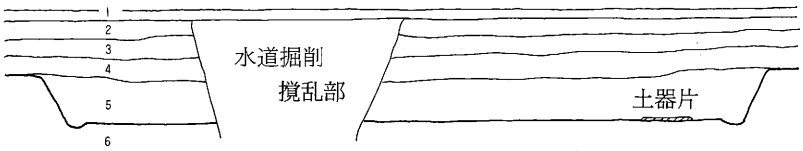


3．第７号住居址

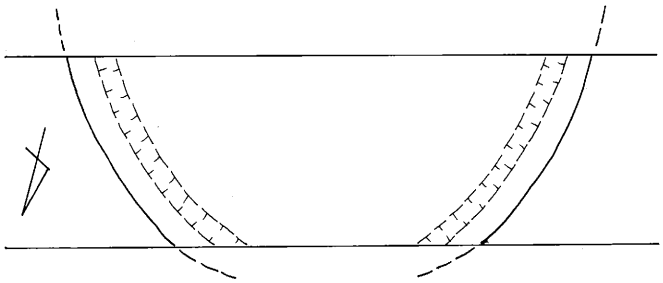


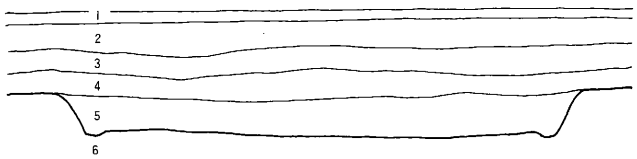
第７図　東小倉遺跡第５、６、７号住居址実測図（１：60）





1．第８号住居址

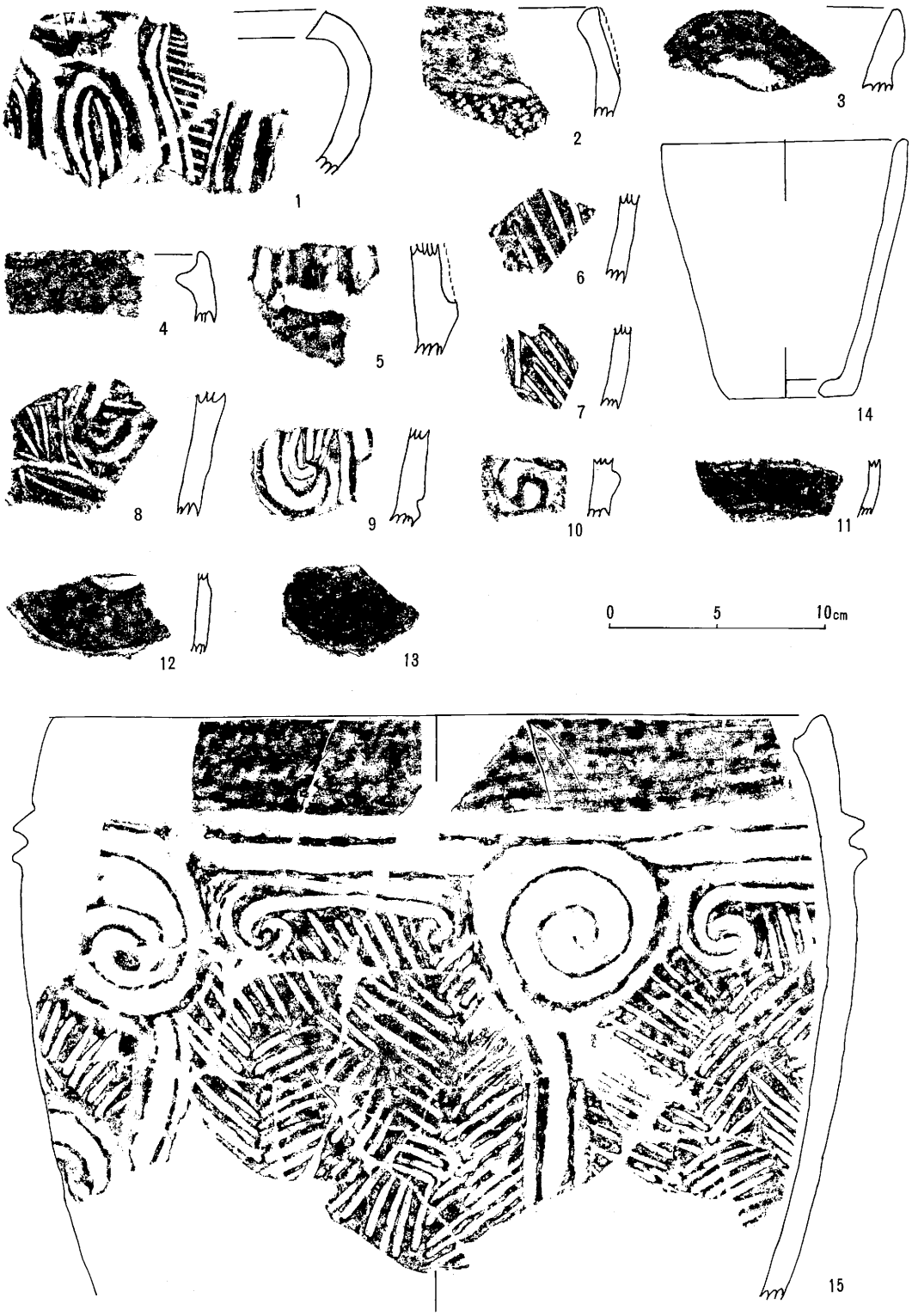




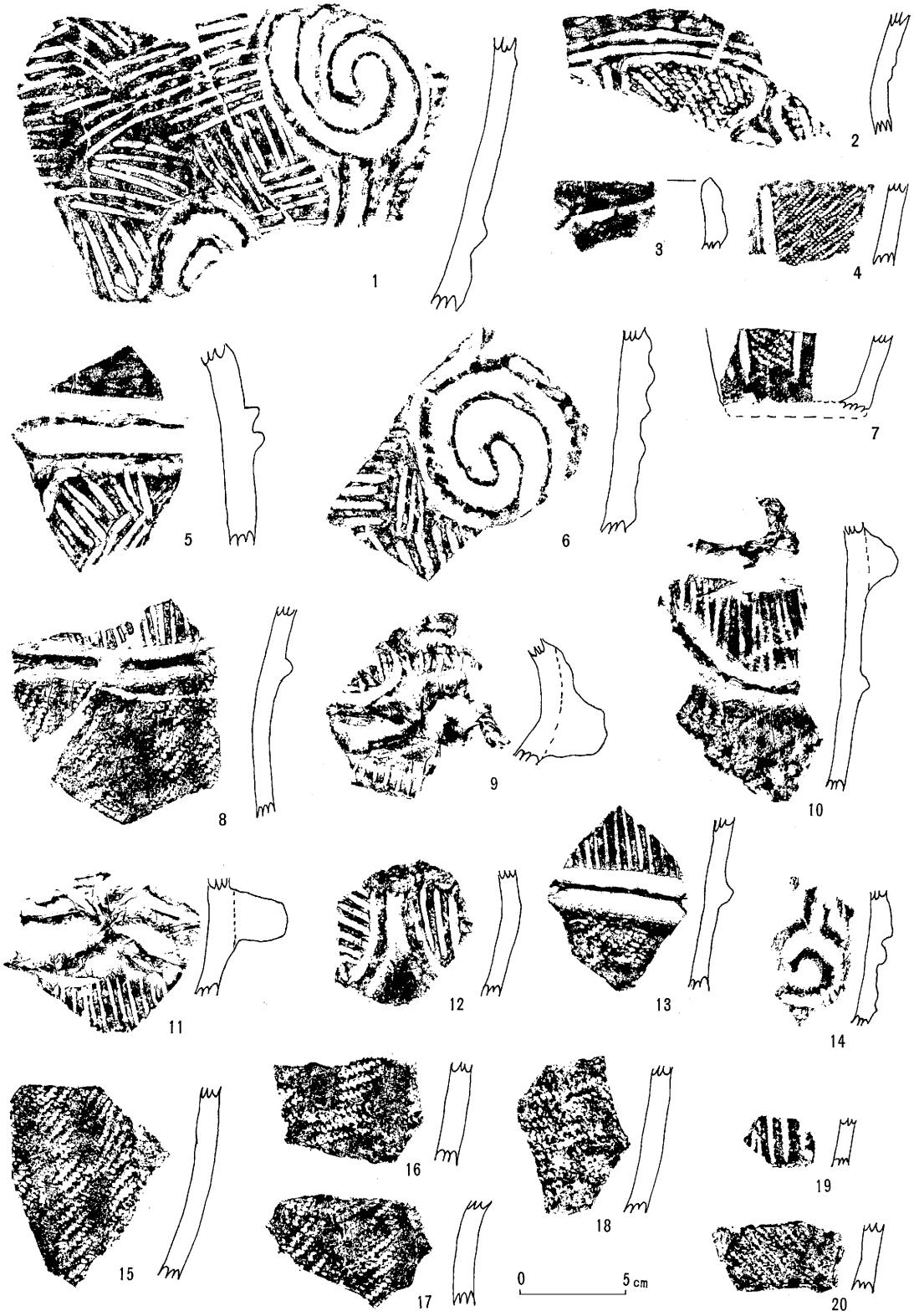
2．第９号住居址

0　1　2m

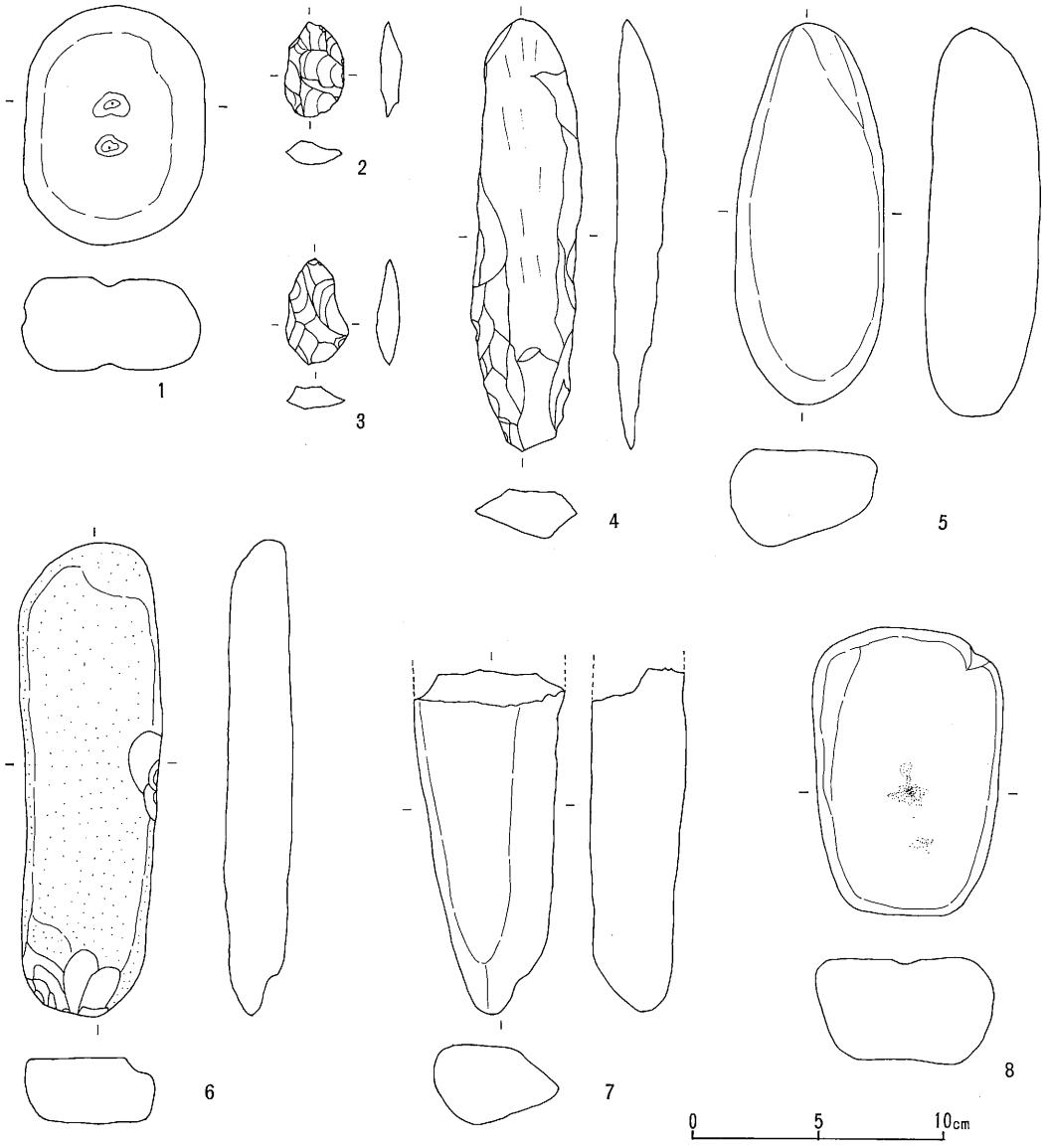
第８図　東小倉遺跡第８、９号住居址実測図（１：60）



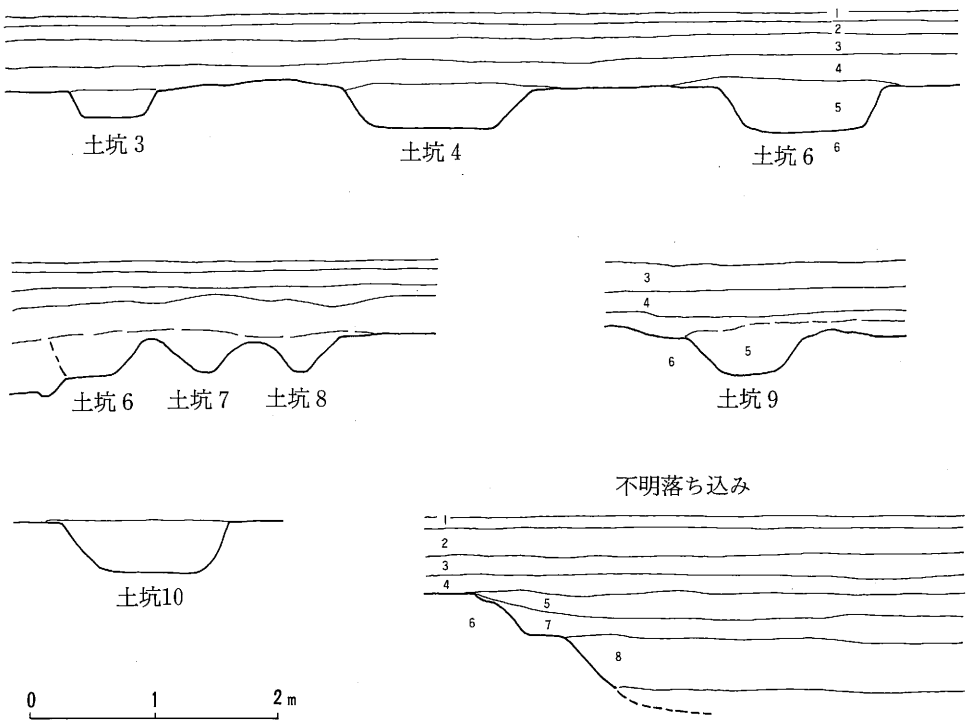
第９図　東小倉遺跡第６、７号住居址出土土器拓影（１：３）（１～14－６住，15－７住）



第10図　東小倉遺跡第７、８、９号住居址出土土器拓影（１：３）
（１～７－７住，８～18－８住，19～20－９住）



第11図　東小倉遺跡出土石器（1：3）　（1－6住，2～7－7住，8－8住）



第12図　東小倉遺跡土坑３～10、不明落ち込み断面図（１：60）

第4章　まとめ

水路改良工事による立会調査で、縄文中期後半の竪穴住居址5軒と6基の土坑の確認を得たことは特記すべき大きな成果と言わねばならない。しかし水路幅という部分的な調査のため、個々の住居址の全貌は不明であることが何としても惜しまれる。また平成5年5月の発掘調査では、本遺跡で4軒の竪穴住居址と小竪穴1基、土坑2基という結果を得ているが、それに比べると今回の幅1.5mで100m区間に上記の確認ということで密度の高い発見と言わねばならない。

これにより「東小倉遺跡」（三郷村の埋蔵文化財第2集）の結語や貞享義民館の歴史講座「三郷村のあけぼの」で述べた東小倉遺跡の重要性が更に確かなものになったといえる。再掲はせず、ここでは集落構成についてのみ記してまとめとしたい。

本遺跡では縄文前期から晩期に及ぶ遺物出土があって長期間にわたる生活が考えられるが、前回調査で縄文中期後半曽利Ⅲ～Ⅳ式期の竪穴住居址が4軒検出されたことは先記した。そしてこの4軒は集落の東限部に当たるものであろうと結語で記したが、今回の調査結果から考えても訂正の必要はなさそうである。

今回調査の5軒は出土遺物が少ないため、時期決定にやや問題があるが、大体同時期の住居址と考えられる。そのため集落範囲は南北方向（1号住～5号住）で110m、東西方向（5号住～9号住）で130mあることが確認されその範囲が大部分明確になったと言える。更に拡がることは確実で、当初想定していた通りの大きな集落規模をもつ遺跡であることが裏付けられたと言えよう。このように今回の水路改良に伴う立会調査は集落範囲を考える上で重要な試掘溝であったと言える。

今後周辺での現状変更には充分留意して集落内容の把握に努めたいものである。

遺物の出土は今回は少なかった。限られた部分の調査であること、工事進行中の調査で特に小形石器等に見落としがあること等で残念に思える。唯一の完形である第6号住居址の埋甕（伏甕）は注目すべき資料である。

工事進行中の調査ということで満足すべきものではないが、上記のような調査結果を得て東小倉遺跡の重要さを再認識することができた。調査のために種々便宜をはかっていただいた豊科建設事務所及び工事関係者の皆様、種々配慮いただいた三郷村教育委員会に感謝とお礼を申し上げて、まとめとしたい。

（山田瑞穂）

図　　版

1　工事進行状況

2　6号住居址　埋甕出土状況

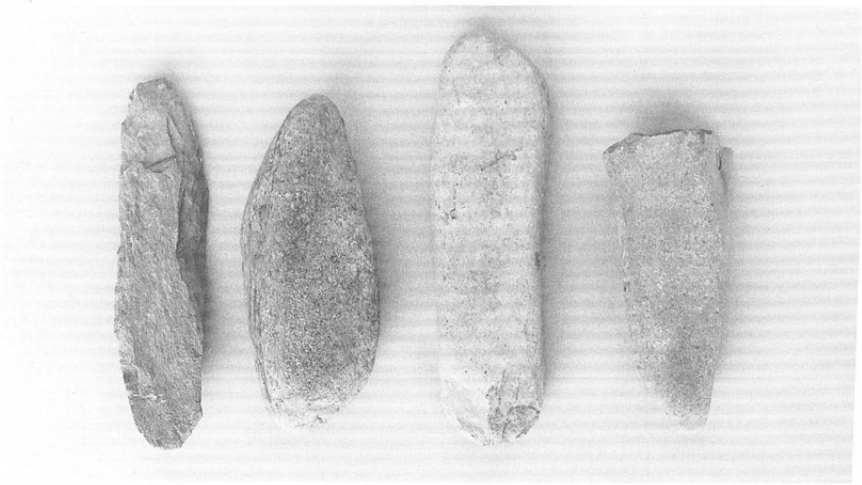
図版 2

1　7号住居址

2　7号住居址　石柱

1　6号住居址出土土器（埋甕）

2　出土石器（6号住・8号住）



3　出土石器（7号住）

図版 4

1　出土土器（6 号住）

2　出土土器（7 号住）

3　出土土器（8 号住）

三郷村の埋蔵文化財第３集

東小倉遺跡

平成９年３月21日　印刷
平成９年３月31日　発行

編集発行　三郷村教育委員会
長野県南安曇郡三郷村大字明盛4810-1
印　　刷　藤原印刷株式会社